

# 2時間後



TOM0612

## 第一章 きょうの料理

---

あと2時間後。あと2時間後に、僕の家に来る。

皿は用意した。もちろん、二人分でいいだろう。大皿が2枚、小皿はうすいピンクの模様入りのものと無地の白いものの2枚ずつ。フォークが2セット、ナイフは1セット。小さいスプーンもつけた。テーブルには淡いオレンジのものと幾何学模様のブルーのランチョンマットも敷いてある。綺麗に磨いたシャンパングラスも置いた。ワイングラスは状況に応じてもう一組出そう。シャンパンと白ワインは冷やしてあるし、赤ワインは冬だからラックの一番上に置いてある。

出会ったのは婚活サイトだった。もう32になるし、そろそろ身を固めないと思ひ、その手のサイトにエントリーした。僕がじゃなく、友人が僕の名前で、だ。

プロフィール欄に生年月日はもちろん、年収やら、学歴やら、趣味やら、僕の個人情報を「友人」が入力した。もちろん、勝手なことをするな、と注意はした。が、二日後にそのサイトからメールで返信があった。「あなたに会いたいという人が一名いらっしゃいました」と。

あと1時間30分後。

まずメカジキのソテーを作る。メカジキは近所の大型スーパーでさっき買ってきた。値段はそれほど高くないけど、12個並んである内から、厳選した。目利きのセンスはまったくないけど、色つやが良いものなら、食べてもおそらく美味いだろうと思ってカゴに入れた。

メカジキはあらかじめ塩、こしょうをしておいた。フライパンにバターを敷いてから、弱火にかける。バターが溶け始めたら中火にし、メカジキを入れる。片面に焦げ目がついたらひっくり返し、白ワインを入れてからふたをし、5分蒸らす。蒸らしている間につけあわせの用意だ。

会いたいという女性は僕より4歳下。学歴は四大卒。いや、もっと詳しくいうと、東大卒だ。在学中に弁護士と会計士の資格を取り、今は虎ノ門にある外資系コンサルティングファームに勤務しているという。そんな女性が僕に一体何の用だ。いや、元々はこちらが登録したのだから彼女には何の落ち度もないし、責める理由もない。彼女からのメッセージで「一週間後の土曜の昼に会いたい」と申し出があったようだ。会えるわけないだろう、と思っていたのだが結局その日に会うことになった。僕がではなく、友人が「会いましょう」と返信してしまっていたのだ。

あと1時間後。

つけあわせはほうれん草としめじのソテーにした。オリーブオイルをフライパンに敷く。バター

は使わない。メカジキの味を濃くするので、付け合わせは薄味でないと駄目だ。しめじを軽く炒めたあと、あらかじめ茹でてあったほうれん草を入れて一緒に炒める。塩・こしょうをして火が通ったら、付け合わせは完成だ。

友人は幼馴染ですでに結婚しているのだが、無趣味な男だからか、土日にも遊びの誘いを僕の携帯のメールに入れてくる。僕はそのときたまたま仕事で忙しく、3週間ぐらいその誘いを断っていたら、その次の週に「ヒマだったから、婚活サイトに登録しといたから」と連絡があった。

僕は急いで彼女に断りの連絡をいれようとしてサイトにつないだけど、できなかった。マイページのIDとパスワードは友人しか知らないからだ。結局、僕の自宅に迎え入れることになった。普通はお互い初めて会う同士なら、外の喫茶店とか、ホテルのラウンジなんかで会うものじゃないのか、と思ったが、「先方」が僕の自宅を指定してきたのだ。いや、正確にいうと、友人が彼女に「自宅で会いましょう」とメールしたら、彼女がどういうわけか「承諾」してしまったのだ。

あと30分後。

メカジキ全体に火が通り、両面にうっすらと焦げ目がついたので火から離れた。メカジキと先ほどのつけあわせを大皿に盛る。バルサミコ酢を軽く熱したものをメカジキの上からかけてメインは完成した。あとはトースターで焼いたバゲットを切り、バスケットに入れた。小皿にオリーブをのせて一緒にテーブルの上へ置いた。すべての手筈は一応整った。

あとはその人が来るまで、ソファで休憩をすることにした。ここまで来て、「俺はなんでこんなことをしているのだ」と疑問に思い始めた。友達に携帯をかけたが話し中だったので、テレビをつけて見ることにした。昼のニュースが天気予報をやり始めたところで、友人から携帯がかかってきた。こいつに改めてこの企画についての疑問をぶつけてやろうと思い、携帯を取った。「もしもし、清水と申しますが林さんですか」。女性の声がした。誰だ？「今から伺ってもよろしいでしょうか」。

12月7日土曜日。12時になった。

僕は慌てていた。「あの、これ健太郎の、あ、いや、大友の携帯ですよ？あれ？」としどろもどろになっていると、

「大友さんにお借りしました。林さんの携帯の番号がわからなかったもので」。ああ、そういうことか、と思わず納得しそうになったが、そもそもなぜ彼女が、清水さんが大友の携帯から電話してきたんだ？と頭が混乱してきたところで、玄関のインターホンが「ピンポン」と鳴った。

